

## 「学力低下」の「問題」。小中学校の教師が違う問いを立てて格闘している現実

センター協力研究員（市川市教育センター指導主事） 津 田 薫

何かが変わった。教師にはその変化が最初は見えない。子どもたちが「新しい」教育課程と「今」の家庭環境の中で育ってきていることの意味が見えなかった…「小学生だから」「中学生だから」とこれまで通りに学習を進めるうちに、子どもたちとの間にズレが生まれたことに気がついた。

このズレが子どもたちとともに順々に上の学校へと押し寄せ、ついに大学にも到達した。「大学生だから」が通用しない。大学から「問題だ」と声があがる。呼応して「学習内容を削減し続ける指導要領の『ゆとり』路線が問題」という報道も多くなっている。だが、捉え方をそこだけに収斂させると「学力低下」問題の実像を見逃すのではないか。だいたい「ゆとり」が「あった」という現状認識自体が問題だ…あなんていうと、なんと生意気なと怒られるかもしれないが、今、大学の教師が出会っている「問題」に一足先に会った小中の教師は思っている。「地道に学ぶことは苦しいこともある。でも人間にとってやはり必要だ」という合意が崩れてしまった、問題の根は深刻だ、と。

小学校低学年の担任が数年ぶりという友人は言う。「1時間の授業がもたない、じっとしていられない」。保護者は「これがうちの子の個性ですから」と言う。学校で学習を成立させることが困難になっている現状に彼女は問題意識と疑問とを持っている。

『「学力低下」も話題にはなるが、選択教科と総合学習の時間増に向けての学校体制の混沌の方が問題。人や準備の時間を保証しないまま突き進む『改革』ってなんだろう』と50代後半のベテラン中学教師は言う。「家庭での予習復習は当然、のつもりで授業をするととんでもない目にあう」。家ではまず勉強をしない。塾には行く。それで勉強はした「つもり」になっている。放課後、学習のために学校に残すと文句がくる。…

小中の現場から聞く子どもたちの語られ方には共通点がある。好きなことやできることには積極的、だが苦手

なことや不安なことには極端に手を出そうとしないという点。そして、親・保護者たちが子どもたちのそういう在り方に結局は同意しているという点だ。

学ぶことについて、インプットとアウトプットの方法について、子どもと教師とそして親も巻き込んで意義と方法を編み直していく。どうしたらいいのか。それが小中教師の立てた現状への問いだ。苦しい。でも、できないことはない。精神論と「美しい」言葉だけではなく、教師に考える時間と余裕とを与える予算と制度への合意ができればだ。だが、予算の捻出と制度改革について本気で考えているのか、と疑念を持つ。だから学習指導要領だけを突出して叩く報道の構造が気になる。「学習内容を増やしそれを教えていけば『問題』は解決する」という錯覚は小中の現場の苦悩と微妙なズレがあるのだ。

先日、幕張でのマックエキスポに行ってきた。22歳になる教え子が大手企業のブースに登場するからだ。彼は英語もできないままアメリカに行き、5年間かけて高校を卒業。独学でコンピュータを学び、その仕事ぶりが認められマックエキスポでの講演となった。と書けば美しいが、そんな簡単なことではない。自信の無さとの苦闘。前以上に無口になった高校時代。何とかして外へ、自信をつけさせたいという親。「個を生かす…」と声高らかに唱える日本だが、彼のような高校生活をおくった子が感じる自分は受け入れられていないという感覚…。

5年かけての高校卒業。今の日本で可能だろうか。多くはドロップアウトしていく現実。アメリカでだからできたのか。支える親がいるから社会とつながれたのか。

苦しみながらも自ら学ぶ意味を見いだすことができた彼。「どういう環境だったからできたの？何がそうさせたの？」。困難に出会うとすぐやめちゃう、まあ、それでも生きていけるや、と（本当だろうか）…掲げられている美辞麗句と現実とのズレが大きい今だからこそ、私は、彼に聞いてみたいことがたくさんある。